



日本土地家屋調査士会連合会発行
会報「土地家屋調査士」
(2006.11月号 No.598)

世界 文化遺産

原爆ドーム

広島支部 金子 和也

「人類史上最初の原子爆弾による被爆の惨禍を伝える歴史の証人として、また核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボルとして「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(世界遺産条約)に基づき世界遺産一覧表に記載された」

平成8年(1996年)12月7日 広島市

広島市中区相生通り(国道54号)沿い(広島市民球場前)、ドーム北側の石碑には英語訳と共にこう刻まれている。

昭和20年(1945)8月6日早朝、広島市民はもとより、日本国民は何の前触れも予告もなく、又、同年7月25日のトルーマン米国大統領の対日「原爆投下命令」¹⁾、翌26日の三国(米・英・中国)

1) 「原爆投下の命令」極秘 陸軍省参謀本部 ワシントン25DC 米戦略航空隊司令官カール・スバツツ將軍

「1. 第二〇航空隊第五〇九飛行隊は、一九四五年八月三日ごろ以降、天候の許すかぎり早急に、最初の特種爆弾をもって、爆撃目標のひとつに、目視爆撃を行なうべし…目標は広島、小倉、新潟、長崎とする。陸軍省派遣の軍人および科学者は、爆撃効果の観測、ならびに記録を行なうべし。そのため、爆撃機に、観測機を随伴せしめる。観測機は、爆撃地点より数マイルの距離にとどまるべし。2. 計画関係者による諸準備の完了しだい、第二弾を前記の目標に投下するものとす。右以外の目標に関しては、おって指示す。」(3・4は省略。傍点は筆者が付した。)参謀総長代理 トーマス・F・ハンディ(F・ニーベル、C・ベイリーⅡ『もはや高地なし』)。家永三郎監修・青木孝寿外編『日本史資料』上(昭和48年、東京法令出版)845頁



世界遺産「原爆ドーム」

巨頭会談によって採択された対日「ポツダム宣言」²⁾など知るよしもなく³⁾、一発一瞬にして、広島市

2) 特に最終条の第13条には、「我等ハ日本国政府方直ニ全日本国軍隊ノ無条件降伏ヲ宣言シ、且右行動ニ於ケル同政府ノ誠意ニ付適当且充分ナル保障ヲ提供センコトヲ同政府ニ対シ要求ス。右以外ノ日本国ノ選択ハ迅速且完全ナル壊滅アルノミトス」とし、原爆投下予告ともとれる条文であった。(ふりがな・傍点は筆者が付した。)家永三郎監修・青木孝寿外編『日本史資料』上(昭和48年、東京法令出版)845頁(日本評論社「資料戦後二十年史」2)、笹山晴生=五味文彦=吉田伸之=島海靖編『詳説日本史史料集』(再訂版)(2004年、山川出版社)342頁(日本外交年表 並 主要文書)

3) 同7月28日、時の鈴木貫太郎首相は、「この宣言は、カイロ宣言の焼直しで、政府としては重大視していない。ただ黙殺するのみである。我々は戦争完遂に邁進する。」と発表し、この談話は、新聞・ラジオにより大きく報道された。(ふりがな・傍点は筆者が付した。)家永三郎監修・青木孝寿外編『日本史資料』上(昭和48年、東京法令出版)846頁

中心部を完全瓦礫無人の焦土と化し、一木一草の息づくものさえ無くなった。

午前8時14分17秒、広島市中心部に位置する相生橋を照準点とし、高度約6,900mから米国B29爆撃機3機(内2機は、爆撃効果観測・記録の観測機)の内、1機=エノラ・ゲイ(機長チベツ大佐)の放ったウランウム原子爆弾=「リトルボーイ」は、虚空をきる巨大な青白い閃光(ピカー)を発生し、広島県産業奨励館(ドーム)から南東160mの上空約580mの地点で爆発・大炸裂(ドーン)を起こし、空中に火山の噴煙が如く、茸雲(原子雲)を発生させると共に、小太陽とも言うべき未曾有の一大火炎球(瞬間的に摂氏数百万度に達した)を、直下の

何の罪もない広島市民、そして、いたいけな学徒・児童に容赦なく叩きつけ、轟然たる爆音と共に猛烈な爆風と熾烈な熱線を放ち、同時に強烈な放射線と多量の放射性物質とを発散し、5分ないし10分後には、広島市北西部一帯に1時間以上に亘り、沛然たる驟雨を現出させた。いわゆる「黒い雨」である。

これが米国極秘裏に研究・開発され、そして投下された人類史上類を視ない原子爆弾による「無差別戦略使用」である。尚、米国の原爆実験は、投下前7月16日にニューメキシコで世界初の同実験に成功し、8月2日に原爆投下の極秘作戦（センターボード作戦）命令書が出されていた。

この原子爆弾は、原子核分裂の高速度連鎖反応によって解放される原子核エネルギーを利用し、広島に使用されたのはウラニウムの核分裂によるもので、続く9日午前11時2分に長崎市上空で使用・投下された原爆は、プルトニウム原子爆弾＝「ファットマン」である。（1953年長崎市の調査では、即死者7万3,884人・負傷者7万4,909人、合計14万8,793人もの甚大な犠牲者があった。）

広島に投下された原爆は、TNT火薬約15ktに相当すると言われており、当時の戦略爆撃の概念を遥かに超えたものであり、現在においても尚、その威力は想像を絶するものである。

原爆の放出エネルギーの約50%は爆風に、約35%は熱線に使われ、残り15%が放射線に割り当てられると言われている。爆発直後の爆発点の最高温度は先述



大正4年完成。県立物産陳列館（後の県産業奨励館）

のとおり、摂氏数百万度に達し火炎球が形成され、この熱線により爆心地は、摂氏3,000～4,000度に達し、鉄をも蒸発させるものである。爆心地から1km以内では、屋根瓦が泡状の火ぶくれをおこした。即ち、摂氏1,800度以上であったことを物語るものであり、当然この範囲で罹災した市民など被爆者の殆どは、人骨もろとも一瞬にして蒸発・粉碎し、その遺骨を拾う術もない。（爆心から500m以内は100%、1km以内では80%の死亡率が推定された）又、圧殺・焼殺の難を免れた爆心から3.5kmに及ぶ範囲の被爆者は、露出部に火傷を負い、生涯原爆症とも闘い続け、或いはそれに破れた被爆者も膨大である。

爆風の破壊力も想像を絶するものであった。爆心から500m以内では堅固な鉄骨造の家屋・建造物さえ破壊に至り、木造家屋は2km以遠に及び倒壊した。家屋の被害は、熱線と爆風により広島市内全域に亘り、半壊半焼以上が全体の92%に及び、全焼5万5,000戸・半焼2,290戸・全壊6,820戸・半壊3,750戸、合計6万7,860戸、その他山林火災12か所に至った。

（昭和20年11月30日広島県警察部発表）

又、罹災・被爆者の被害は甚大である。確実な数は明らかでないが、被爆直後8月25日の広島市の報告によれば、死者4万7,185人・行方不明者1万7,425人・重傷者1万9,691人・軽傷者4万4,979人・罹災者23万5,665人、合計36万4,945人に達した。この中には、当時来広中の約9万人を含んでいるが、約8万人と推定される軍部関係者は加わっていないため、被害は更にこれを上回るとされている。

死者の数は、負傷・火傷・原爆症の悪化によって日を追う毎に刻々と増加し、市内中心部のいたるところ「死屍累々」となり、おりからの炎天下とも重なり、この一帯の凄惨たる様は、まさに「地獄の惨禍」、「地獄絵図」であったと伝えられている。

約3か月後の調査によれば、死者7万8,150人・行方不明者1万3,983人・重傷者9,428人・軽傷者2万7,997人・罹災者17万6,987人、合計30万6,545人、この他当時の市外避難者4万0,751人を加えると34万7,296人に達し

(昭和20年11月30日広島県警察部発表)、この中にも軍部関係者は含まれていない。この数は、その後中央終戦連絡事務局から「GHQ」(連合国軍最高司令官総司令部)に報告され、昭和26年2月2日そこから発表された数であるが、必ずしも正確とは考え難く、その後の調査によっても、未だ決定的な数は不明確であるが、このウラニウム原子爆弾、いわゆるピカドンによって、昭和20年中に約14万人の尊い命がこの広島の地で犠牲になったと推定されている。

又、戦後に至っても放射線の影響は切実深刻であり、ピカドンによる直接被爆者はもとより、被爆直後に市内に入った人々や、市内中心部以外でも^{おびただ}夥しい数の被爆者・罹災者の救護や看護、行方不明者捜索等に従事・あたった人々にも及んだ。これら人々は、いわゆる「二次被爆者」となり、直接被爆者と同様、生涯原爆症(放射線症)と闘い続け、又それに破れて逝った人々でもあった。

広島市内とその近郊では珍しい話ではないが、筆者の母の妹もこの二次被爆者(被爆当時12歳)の一人で、原爆症によって被爆後16年目にして突然、急性の「白

血病」に罹り、二人の子(3歳と1歳)を残し28歳の短命でこの世を去った。死ぬ間際、病室のベッドの傍らに子の一人(1歳)を置き、母に「お姉ちゃんこの子を頼む」と言ったそうである。同室で入院(再生不良性貧血症)されていた田村慶子氏の日記(『ヒロシマの夜の病棟から』1963年7月31日(水)晴)には、「白血病と知らぬ妹の手足なで ひとすら生きと姉は念じつ」⁴⁾とはしり書きされ、母も「ようならたらずぐ戻すけえのう ようなれよ ようなるんで」とまさに念じたそうである。

戦後61年を経た今でさえ、このピカドンの惨劇に苦しむ被爆者、又、悲しみ、言葉にできない無念を抱く遺族が、この広島はもとより、全国、いや国境を越えて多く存在する。原子爆弾の「無差別戦略使用」は二度とあってはならない。核廃絶こそが、それを許さない一番の必須条件であることは世界の誰もが周知であるのに…とドームはこの広島の地でこれからも語り続ける。

4) 田村慶子著・佐藤友之編『ヒロシマの夜の病棟から』-被爆者日記抄(1977年、太平出版社)21頁

【参考・引用文献】

- ① 家永三郎監修・青木孝寿外編『日本史資料』上(昭和48年、東京法令出版)844頁～858頁・891頁～895頁
- ② 広島市史編修委員会『概観広島市史』(昭和30年、広島市役所)169頁・190頁～198頁
- ③ 岸田裕之編『広島県の歴史』県史34(1999年、山川出版社)286頁～290頁
- ④ 笹山晴生=五味文彦=吉田伸之=鳥海靖編『詳説日本史史料集』(再訂版)(2004年、山川出版社)341頁～343頁
- ⑤ 田村慶子著・佐藤友之編『ヒロシマの夜の病棟から』-被爆者日記抄(1977年、太平出版社)21頁

この記事は、平成18年に日本土地家屋調査士会連合会が発行した
会報「土地家屋調査士」(2006.11月号 No.598)に掲載された編集原稿です。